

中國文學史

内田泉之助著

中國文學史

東京明治書院

著者略歴

明治廿五年六月 福島縣に生る。

大正十五年三月 東京帝國大學文學部支那文學科卒業。

武藏大學教授の外、東京女子大學・東京大學・法政大學等の講師を歴任。

現在二松學舍大學教授。文學博士。

編著書

唐詩新選

新選唐詩鑑賞

新釋和漢名詩選

漢詩百選

古詩新選

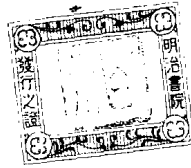
文選（詩篇）新釋漢文大系本

古詩源（漢詩大系本）

昭和三十一年七月五日印
昭和三十一年七月十日發
昭和四十四年四月十五日發發行

刷中國文學史

定價金 一、二〇〇圓



著者 東京都中野區江古田四丁目二八番地の一六 內田泉之助

發行者 東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地 株式會社 明治書院 代表者 三樹彰

印刷者 東京都千代田區神田保町三丁目十番地 共立印刷所 代表者 春山宇平

發行所

東京都千代田區神田錦町一丁目 株式會社 明治書院 振替口座東京四九九一番

郵便番号一〇一 電話東京四五三三六（代）

序

余の中國文學史に筆を執つたのは、昭和八年共立社の需めに應じ、同學長澤規矩也君らと共に「漢文學講座」を開設した時に始まる。同講座は中絶したために、余の分擔した文學史も建安時代までで終つてしまつた。その後、稿は續けたが、怠り勝ちの余にはまことに牛歩遅々たるものであつた。それに加へ、戰災に遇うて、家も書も一切の研究資料も失ひ盡した後は、余も妻子を養ひ、自らを生きぬくために、身も心も勞さねばならず、續稿の作成などには到底力が及ばなかつた。思へばあさましくもあわただしい數年であつた。近年は本務の仕事に追はれて、身邊は頗る多忙を極めたが、仕事の傍ら寸暇を求めては少しづつ書き續け、ともかくもまとめ上げたものがこの一書である。本年春以來、少閑を得たので、全稿を整理し始めて見ると、長年月に亘つた執筆のために、敘述の方法、表記の形式等にも、前後の不統一があり、新たに訂正補足をすべき點も數多く、それらに手を入れて、多少體裁を整へたが、未だ十分とはいひ難く、古色の蒼然たるものとなつて、之を公にするのに忸怩たるものがあるが、敢て書肆の厚意に應ずることとした。老學徒が二十餘年に亘る編述で、余個人にとつては思ひ出深いものではあるが、之を以て學界に問ふなどといふ自負の

念はもとよりない。ただ過去二三十年來この方面の專書の極めて少い我が國にあつて、中國文學の歴史を概観しようとする人々のために門逕となり得れば幸と思つてゐる。

さて顧みるに、近年中國文學、特に漢詩や戲曲・小説に對する世間の關心は一般に高まりつつある。隣邦の學界を一瞥しても、文學の觀かた、文學史の扱ひかたに、戰後著しい變動のあることが目につく。しかしまた退いて、單純に考へる時、文學史が過去の文學の發達變遷の跡を敘するものである以上、その史的研究の方法が、時勢により人により、やたらに變轉すべきものとも思へぬ。そこには不動の一線が貫かれて然るべきものと信ずる。われらは常にこの一線を辿るべきであらうが、しかしその一線の究明は、なかなか容易のわざではない。何しろ地域に於て廣大、時代に於て三千年に亘る中國無數の作品をあまねく検討して、文學史を編述することは到底個人の力の及ぶ所ではない。従つてどうしても古今・内外學者の研究成果に頼らねばならぬことになるが、その取捨選擇には、當を得なかつたり、力の及ばぬこともあり得よう。余も自らの力の範圍内にあつては及ぶ限りの努力は致し、引用の典據は隨所に明記もしたが、杜撰の譏りは免れないであらう。

敘述は上代、ことに漢・唐以前、就中詩・文の分野に、力を用ひた。近代特に革命前後の文學を敘べるには自らその人があり、勿論余の任ではないので、概略に止めたが、それすらも正鵠を得ないかと恐れる。思ふに近代作品については今少し時代の洗煉を経て、濾過作業が施されねば、文學

史の對象たり得ないではあるまいか。余は平素世人がともすれば新奇を追求するに急で、古典を尋繹することの少いのを慨く一人である。本書が多少でも、この方面に關心を寄せられる助けとなり得れば望外の幸である。

書成るに及んで、恩師・知友、並びに既知・未知の古今・内外學者の業績に負ふ點の多いこと、ことに同學長澤君には一部原稿の閲讀を煩したことを記し、各位に對してここに感謝の辭をささげたい。

終りに恩師鹽谷先生の多年に亘る御指教を謝し、またその昔始めて文學史を講じて下さつた先師岡田秀夫先生を追慕し、老いて益々壯なる博士の壽を頌すると共に、留學半ばにして不歸の客となられた先師追悼の情に堪えない。

昭和三十一年五月

内田泉之助 識

本書を刊行して以來四年有半、版を重ねること數度、幸に閲讀を賜つた師友各位並びに多數の方々から種々の教示を忝うした。また余自らの考の至らなかつた點も多々あり、これらを併せて訂正し、ここに増訂版を出すに際しては別に稿を改めたいのであるが、組版の都合上思うにまかせず、とりあえず紙型によつてできるだけの改訂を加え、全般の改稿については他日を期することとした。再び讀者の高教を仰ぐ次第である。

昭和三十六年二月

著者 再 識

目次

序説	一
----	---

文學の語義 中國文學の特質 言語と文字 風土と民族性

第一章 先秦文學	一五
----------	----

その一 春秋以前	一五
----------	----

第一節 總説	一五
--------	----

文字の制定 上古の歌謠 散文の源流 尙書 周易

第二節 詩經	二四
--------	----

編者 風・雅・頌 詩序 作品の内容 製作の時代 作品の分布 詩形 六義説 逸詩
影響 概括

その二 春秋以後	三七
----------	----

第一節 總説	三七
--------	----

人物の輩出

第二節 散文の發達	四〇
-----------	----

孔子・老子 論語 道德經 孟子 荀子 列子 莊子 莊子の文辭 韓非子 春秋左傳

國語 戰國策

第三節 楚辭

北方詩風の不振 楚辭の出現 作家屈原 屈原の作品 離騷 九章 天問 九歌 詩形

詩材源流 發展 宋玉 景差・唐勒 附孫卿賦 影響 概括

第二章 秦漢文學

その一 秦時代

焚書・坑儒 文字の改定 李斯上書文 刻石七篇

その二 漢時代

第一節 總説

漢初の休養政治 言論の自由 老莊主義 儒教獎勵 紹述的傾向 東漢の教化 思想の沈滞

民間文學 女流作家 小説の創始

第二節 論策の名家

賈誼 鼂錯 賈山 鄒陽 枚乘 董仲舒 公孫弘 劉向 揚雄

第三節 史書の編述

作者司馬遷 史記の體裁 史記の文章 史記の補撰 漢書の作者 漢書の特質 其の他の史編

附論衡

第四節 辭賦の盛行

辭賦の特色 辭賦の發展 漢初の作家 武帝時代 前漢後期 後漢の作家

第五節 樂府の勃興	二四
-----------	----

漢初の歌謡	樂府の起原	分類	郊廟歌辭	鼓吹曲辭・横吹曲辭	相和歌辭	雜曲歌辭
詩形内容						

第六節 五七言古詩の生成	一三七
--------------	-----

舊説の検討	李陵蘇武詩	古詩十九首	其の他の古詩	五言詩の先驅	五言詩の發生	七言詩の發生新詩形の生成
-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------------

第七節 神話・傳説の記載	一四
--------------	----

山海經	穆天子傳	淮南子
-----	------	-----

第三章 六朝文學	一五
----------	----

第一節 總 説	一五
---------	----

時代の形勢	思潮の概観	北朝文學
-------	-------	------

第二節 建安時代	一六
----------	----

過渡時代の文學	三曹	七子
---------	----	----

第三節 魏晉時代	一七
----------	----

清談の流行	竹林七賢	蜀の文學	太康の作家	東晉の詩人	陶淵明	佛典の翻譯	小説の出現
-------	------	------	-------	-------	-----	-------	-------

第四節 南北朝時代	一八
-----------	----

文體詩風の一轉	元嘉の雄	竟陵の八友	陳の作家	北朝詩人	六朝の新樂府	駢文の發達
---------	------	-------	------	------	--------	-------

著述の文章 文學批評と詩文の選集 概括

第四章 隋唐文學……………三二一

その一 隋時代……………三二一

唐代の先導 作家煬帝

その二 唐時代……………三二四

第一節 總 說……………三二四

唐詩隆盛の原因 唐詩の特質 唐詩の時代區劃 散文の進展及び小説類

第二節 初唐の詩……………三三一

六朝の餘風 律詩の生成 復古の主張 口語詩の先驅 其の他の作家

第三節 盛唐の詩……………三三九

詩仙と詩史 田園詩人 邊塞詩人

第四節 中唐の詩……………三四一

大曆十才子 詩の白話化と元和體 韓愈とその一派 韋應物と柳宗元

第五節 晩唐の詩……………三五七

李商隱と溫庭筠 小杜 其の他の作家

第六節 復古文の主張……………三六四

韓愈 柳宗元 文壇の趨勢

第七節 傳奇小説の發展……………三七〇

神怪類 艶情類 劍俠類

第八節 詞の興起……………二六八

詞の起原 唐代詞人 西蜀南唐の詞

第五章 宋代文學……………二六九

第一節 總 說……………二六九

時代の大勢 學術進步の原因 政爭と學者 散文の發展 詩賦の傾向 詩文話の出現 詞の

極盛 白話文の發達

第二節 古文の隆盛……………二七〇

古文提唱の先導 歐陽脩 曾鞏 王安石 三蘇 南宋の文章

第三節 詩體の分派……………二七〇

西崑體の流行 西崑體の矯正 江西詩派の成立 江西派の進展 江西派の反動

第四節 詞の極盛……………二七〇

北宋の詞 南宋の詞

第五節 話本雜劇の發生……………二七〇

敦煌遺書 市井藝術 話本の出現 戲劇の起原 雜劇の發生

第六節 金代の詩人……………二七〇

元好問

第六章 元明文學……………二七三

第一節 總 說……………三四三

元代概観 元曲の勃興 散曲の發達 明代概観 擬古主義 戲曲小説の發展

第二節 擬古の詩文……………三五五

劉因と趙孟頫 元朝の四傑 楊維禎 明初の作家 臺閣體の流行と反動 擬古の主張と反動 擬

古派の再興と反動 明末の作家 八股文

第三節 戲曲の勃興……………三七五

元曲の體裁 元曲の作家と作品 南曲の發展と體裁 南曲の作品と作家 雜劇の轉變 散曲作家

第四節 小説の發展……………三九八

演義小説 英雄小説 神怪小説 寫實小説 短編小説

第七章 清朝文學……………四二三

第一節 總 說……………四二三

學術界の傾向 詩說と詞派 駢文と古文 戲曲と小説

第二節 模倣の詩詞……………四三三

清初の詩人 王士禎と神韻說 沈德潛と格調說 袁枚と性靈說 清末の詩壇 詞の作家

第三節 桐城派古文と駢文……………四三四

清初の古文作家 桐城派の作家 駢文作家

第四節 戲曲小説の演進……………四四四

李笠翁と十種曲 洪昇と長生殿 孔尚任と桃花扇 蔣士銓と紅雪樓九種曲 新興の俗曲 人情

小説 俠義小説 諷刺小説 文言小説 彈詞

第八章 文學の革新……………四六七

革新の先驅 文學革命 新文學の建設

中國文學年表……………四七九

索引……………五〇二

中國文學史

序　　說

印度と並んで東洋の古國と稱せられる中國は、早くから文化の開けた國で、その民族を代表する漢族は、今から三千年以上の昔に於て、既に相當發達した獨特の文化を有した事は確かである。彼等は早く特殊の文字を創作し、之を使つて彼等の思想感情を發表し、之を今日に傳へ來つたのである。中國文學なるものはかくて發達したので、文字の古國たる中國は同時に文學の先進國でもあつた。

こゝに中國文學史とは、いふまでもなく此の古國上下三千年の間に於ける文學の歴史的展開の跡を考察しようとするのであるが、之に先だつていはゆる文學といふ語が、古來中國に於ては如何なる意義に解せられて來たかを一瞥するの要がある。何となれば、中國に於ては、時代により人により此の語に對する解釋が極めてまちまちで、其の解釋の如何が、其の時代々々の文學を特色つけて居ると思はれる點が多いからである。最初から文學はこれこれのものと、其の範圍を限定して、その範圍内に於てのみ資料を採擇して、其の變遷を見るといふ扱ひ方もあり得るわけであり、現に近時中國の學者によつて發表された文學史は、多く此の態度を取つて居り、甚しきは殆ど詩歌・戯曲・小説の變遷のみを以て文學史を敘述してゐる著述も見えるが、既に述べた如く、三千年以上の古い歴史を有する此の國につい

て、苟くも文學全般の變遷を考察し、其の流動の跡を究めて、生命ある文學史を構成するには、之では物足らぬ感じがする。そこで先づ各時代人の文學に對する見解を概觀し、之を顧慮しつつ作品を検討し、文學史の敘述を試みようと思ふ。

文學の語義 そもそも文學の語義は頗る廣汎であるが、先秦時代に於て、いはゆる文學とは、概ね一切の智識、學問を兼ね指したものだと思はれる。彼の「論語」先進に孔門の四科として、德行・言語・政治・文學を挙げ、子游・子夏を以て文學の士と目した其の文學の語の如きも、要するに博學の意、或は學問の意に外ならぬ。而して當時の學問は主として詩書を指してゐる。擴むれば、詩書六藝の全部がそれで、即ち孔門の文學なるものは、實に經籍の通稱であつた。『行うて餘力あれば、則ち以て文を學ぶ。』而學『我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。』子罕とある此の文も畢竟文學の意で、其の義は經籍の意に外ならぬ。更に韓非子が、

道を學び方を立つるは離法の民なり。而るに世之を尊んで文學の士といふ。六反

と謂つたのは、道術・方術を學ぶ者を以て文學の士と呼んだもので、當時一切の學術を文學と稱したものとも見られる。降つて漢代に至つては、後漢の王充が、五經六藝・諸子傳書・造論著說・上書奏記・文德之操、これらを以て皆文と稱してゐる。論衡佚文言ふ所は頗る廣いが、要するに漢代以前に在つては、文字で記述せられたものは、其の散文と韻語とに論なく、一樣に皆文學と稱したと見るべきである。之を具體的に言へば、詩歌辭賦は固より、先秦以來の經傳諸子、古今の史籍雜文、國家の律令、公私の奏牘悉く文學であつたのである。然るに此の傾向が六朝に至つて大いに變改し、文學の意義が餘程限定せられ、それだけ明確になつて來た。是れまた當時の思潮が然らしめたもので、一

部の「文選」並に其の撰者昭明太子の序文は之を明かにしてゐる。即ち太子は集類を以て經・史・子の外に獨立せしめ、之を以て文章を表はすの語となし、専ら『事沈思に出で、義翰藻に歸す。』文選序の文を採つたのである。いはゆる沈思とは深く意匠をこらすことを指し、翰藻とは文辭を飾る事をいふのである。即ち美的修辭の文を以て文章の本領としたもので、六朝時代に於ける學者の文章觀は實にここに在つたのである。劉勰りうけんの「文心雕龍」に、『韻無きものは筆なり。韻あるものは文なり。』總術と述べて、韻文を「文」となし、散文の「筆」と區別したのは更に其の範圍を極限したものであるが、此の反動は唐代に至つて現はれ、韓愈・柳宗元二子が古文復興の提唱となつたのである。即ち文を以て道を明かにするの具となし、采藻を斥け、平易を旨とし、經・傳・史・子の文を以て文章の本領とするに至つた。是れ昭明太子によつて唱道せられた修飾の文が、質實平明の文體に復歸し、劉勰によつて文の埒外に放たれんとした散文が、再び文學の主要なる地位を取戻すに至つたもので、この傾向は宋代に及んで、一層強められ、以下元・明・清に至るも大體に於て變革がない。要するに『文は道を貫くの器』李漢韓昌黎集序との見解は、古來中國人の文學に對する中心觀念を成し、従つて六經を以て文學の上位に置くものの如くである。若し單に此の點よりするならば、その文學觀は頗る道義的であり、且つ散文を重んじたともいへる。けれどもこれは社會の上層に在る幾人かの學者の見解を本として、表面的に觀察した時代人の文學觀に外ならぬ。その底流をなす一般民衆の思想はもつと自由であつたと思はれるから常に散文と表裏して發展し來つた韻文の流動を觀ねば文學全般の動きは固より知り難い。殊に民衆の素朴な思想感情は多く無名作家の歌謡となつて保存せられて居るのを思へばなほさらである。

ここに於てか、先秦時代に於ける詩經・楚辭はもとより、漢・魏の辭賦や樂府、唐・宋の詩・詞の變遷を度外視し

ては中國文學史は成立せぬ。韻文の一轉した戯曲、散文の一體である小説、前者は元・明に勃興し、後者は明・清に盛行したもので、共に近年に至つて學者の注意を喚起し、その研究を見るに至つたのである。ただ作者の多くは之を文學の末技として取扱つて來た傾向があり、従つて其の成果も爾餘の文學的作品に比しては遜色なしとせぬが、今日に於てはこれもまた文學の重要な一部面たるは勿論である。

以上雜駁ではあるが、文學に對する中國人の見解を概見し、併せて本書に取扱はうとする文學の範圍を示したのである。即ち苟くも中國の文獻中、美的内容を有するものであるならば、それが經子の文たると、詩詞の語たるを論ぜず、韻文たると散文たるとに拘はることなく、みな一樣に文學史の對象となり得るのである。ただ之が取扱ひに當つては、上述した中國人の文學觀を顧ねばならぬといふのである。

中國文學の特質 中國文學といふものの意義を此の如く解して、次に此の文學の有する特質に就て述べようと思ふ。今此の特質を分つて中國民族の使用する言語・文字より來るものと、中國民族の特性の反映より生ずるものと二とすれば、前者は形式の方面であり、後者は主に内容の方面に屬する。

言語と文字 文學を組成する形式上の要素が、言語と文字であることは今更説明を要せぬ。而して中國語は言語學上印度アルタイ語に屬し、印度ヨーロッパ語英・獨・佛等ヨーロッパの各國語及びウラルアルタイ語日本・朝鮮・滿洲・蒙古語等と鼎立して世界言語

の三大宗を成すもので、其の特質は單音にして孤立語であることである。單音といふのは一音節から成り、一音一義を有することを指すもので、既に單音語であるが故に、語音の種類はあまり多くあり得ない。現代の北京官話に於ても、音の種類は四百を多く出ないといはれてゐる。而も之を以て表現すべき概念は無數にあるのであるから、勢ひ同